群馬県富岡市立富岡中学校二年
嶋村瑚子

『私は僕、僕は俺、俺は私』

僕が進まなかった『男の子』という道。なぜ、『女の子』という道を選んだだけで、こんなにも日常生活に迫ってくるのか。性別が違うだけで差別され、自分の生きる道を誰かに壊されなければならないのか。僕は、どこの道を通ればいいのか分からず、迷子になってしまった。

僕は自分が選択した大好きな道に看板が立ち、壊れて通れなくなってしまったことがあった。僕は、小さい頃にサッカーを習っていた。僕がいたサッカークラブは、男の子しかいなかったが、僕はサッカーが大好きだった。

『僕』はそれを気にしてはいなかったが、それを変えてしまう出来事があったのだ。いつものように練習をしていると、目の前に刺さった大人たちの話し声。「瑚子さん女の子なのに、サッカー？」それを聞いた瞬間、体中

にテープを貼られてしまったように動けなく

なってしまった。

・・・僕は、サッカーを辞めてしまった。

ボールを蹴るたびに、僕はサッカーをやって

はいけないんだ。大好きな道が大きな看板に

よって壊れて通れなくなってしまった。

皆さんは、今僕の演説を聴いて、違和感を

もった人が多いのではないでしょうか。『僕

』という一人称は、男の子が使うはずだと。僕

は、男の子が使う一人称に憧れた。でも、使

ったら笑われてしまうだろうと思った。

そんなある日、友達と話していると、無意

識に僕の口からこぼれてしまった。

「僕は、あ・・・。」

相手は男の子だった。『僕』は馬鹿にされ

てしまうと思った。しかし、

「一人称いいね」と。

僕を馬鹿にするわけでもなく、友達はほめて

くれた。『僕』は驚いて、「変だと思わない

の？」と聞いた。そうしたら、

「別に、『俺』も『私』にしようかな。」

と言ってくれた。僕は、本当に嬉しかった。

なぜ、僕はサッカーができなかったのか。

それはサッカーに『男の子』というイメージの看板が建てられていると思ってしまったからだ。そもそも、看板とは、『通行人の目に届くもの』言葉も、目に届くように発せられるもの。目に届くようにすることで、他人の行き先を変えようとするのだ。僕はすっかり、その看板に従ってしまった。

道は誰でも自由に通れるはずなのに・・・。

サッカーをやってはいけないというルールはないはずなのに・・・。

サッカーをすることだって『個性』の一つのはずなのに・・・。

サッカーは、差別がないスポーツだということが小さかった僕には分からなかった。

なぜ一人称が男女によって違うのか。それは、『僕』を使うと必然的に性別を判断してしまうからかもしれない。女の子だって、『

僕『と言いたいと思うことは、その人の『個性』なのに。一人称は、『個性』を表す一番の近道なのに・・・。

しかし、性別が分かれているからこそ、安全に守られている道を通ることができることもある。例えば、洋服の種類だ。メンズやレディース、男女でも肩幅が違い、腰回りの大きさだって違う。服の種類や大きさの表示がなければ、服を探すのに時間が掛かるだろう。

また、学校で行う持久走もそうだ。僕たちは、人それぞれ体力が違う。中でも一番違うのは、男女の走る距離だ。持久走をもし、男子の距離を女子が走ると体力的に大変だろう。走ることなど、身体の構造には生まれながらの違いがある。そのため、男女共に力を発揮するためには、走る距離の差がどうしても必要になるのだと思う。このように、お互いがお互いを尊重することが重要な場面も必ず訪れるのだ。

性別があるからこそ、安全に守られている

20 × 20

道もあり、看板が建ってしまい壊されてしまう道もある。僕はその道を誰かが渡るための歩くための『個性』という橋を架けたい。貴方も僕と一緒に『個性の橋』を架けませんか。

だって、『私は僕、僕は俺、俺は私』なのだから。

20 × 20